

アクティブ
ストーリー
23

大津耕太さん 愛梨さん

ドイツの大学院を経て
阿蘇の麓で専業農家の後継に。
農業は、環境と景観を守り
食の安全や文化も育てる。
もっと生産の現場を
見てもらいたいというのが夢。



1月に生まれた双子を抱いて

大津耕太さんは熊本市内で生まれました。小さい頃は、よく阿蘇の麓で専業農家を営む伯父さんの家に行き、田んぼや近くの溪流で遊びました。しかし山林開発や河川改修で遊び場がどんどん減り、緑が失われていくことに疑問を感じ、環境に配慮した都市計画を学ぶため、慶応義塾大学環境情報学部に進学しました。

愛梨さんは父親の仕事の関係でドイツ生まれです。幼い頃に帰国し、東京で育ちます。母親がバリアフリー住宅を専門に手がける建築家で、小さい頃からよく建築現場に連れて行かれ、車いすの障害者と一緒に遊び回っていました。そこで「家の設計は母に任せて、私は障害者に優しい都市計画を勉強しよう」と、耕太さんと同じ大学の学部に進学します。

卒業後は ドイツに行こう！

二人は同じ学部・学年でしたが、出会ったのは、4年生の就職活動も落ち着いた頃でした。当時は就職氷河期の真最中。同級生たちはスーツを着て走り回っています。しかし愛梨さんはリクルートスーツを着て会社訪

独立して何かをやりたいのなら
農業は最高に楽しい職業

ACTIVE
STORY

いろいろな所に行って さまざまな経験をして 自分の居場所を探そう

間をすることが嫌で、生まれ故郷のドイツに長期間住みたいと考えていました。耕太さんは学部時代ドイツ語を熱心に学び、短期留学も経験。ドイツに対して強い関心を持っていました。

自然と 共存した生活

ドイツでは高校卒業後にストレートに大学に進学する若者は少なく、数年社会経験を経てから、大学へ進学することも特別なことではありません。二人が留学を決めたときも、ドイツの大学から1年間社会勉強をしておきなさいという条件が付きました。そこで、二人は1年間環境関連のアルバイトをし、翌年から二人で留学することになり

放牧中の阿蘇のあか牛。畜産することで、草原を維持することにもなる。



ました。

ドイツの大学では、自然と共存した生活を実践している先生に出会います。自分で農作物を作り、粉を挽いてパンを焼く生活。大学の講義内容を実生活でも実践している先生の考え方や暮らしに感銘を受け、いつかは日本でそのような暮らしをしたいと思いました。

ドイツでの生活は3年半続き

大津耕太

KOTA OTSU

1975年熊本市生まれ。慶応義塾大学環境情報学部卒業。専門は景観計画で、3年半ドイツに留学し、ミュンヘン工科大学で修士号を取得。03年4月より阿蘇郡白水村で農業を始める。

大津愛梨

ERI OTSU

1974年ドイツ生まれ。慶応義塾大学環境情報学部卒業。高校時代にイギリスに留学も経験。耕太さんとは99年に結婚。06年1月に連蔵くんと桔平くんの双子が誕生。

ました。その後、帰国後の生活の計画もないまま、成田空港に着いたその足で北海道に飛び、農場のアルバイトをしながら、将来の計画を考えていました。

農家の後継ぎに

「東京の生活では、1日中まったく土を踏んでいないことに気づきました。僕にとつては生きている実感が無い場所でした」と耕太さん。愛梨さんも将来の家族のためにも都会には住みたくないという気持ちがあります。そこで、耕太さんの伯父さ

農業は楽しい!

農業を始めるときに叔父さんから「農業は儲からんよ」と言われました。農業は決して楽な職業ではありませんが、逆に農業の楽しいところはたくさんあります。朝は少々早いのですが、3食家族揃って食事ができ、昼寝もできます。日が暮れたら仕事は終わり、残業がない。何よりもすばらしい景観を見ながら仕事ができます。

(耕太さん)



やっていくことに決めました。

周囲からは、せめて10年くらいは東京で社会生活をしてからと反対されました。しかし「ただでさえ高齢化している農村に自分たちも年を取ってから行ってもしょうがない」と思い切りました。

現在は叔父さんの家の隣の空き家を自分たちで改修して、農業を基盤として、環境やドイッに関する仕事もして暮らしています。主な作物は、有機農法で育てたお米「おあしす米」です。周辺20件の農家と協力して育て、直接消費者の家庭に宅配便



で届ける産直をしています。田んぼの条件によって合鴨か鯉を放して除草や害虫駆除をしながら育てているため、合鴨の合

「愛」と鯉、「恋」で「恋愛農法」と呼んでいます。阿蘇の麓は寒暖の差が激しく、太陽もいっぱい降り注ぎ、おいしいお米が育ちます。

頭も体も使って

愛梨さんは「農業は工夫次第で、ものすごくやりがいと可能性がある職業だと思っています」と語ります。耕太さんも「農業は自然を相手に頭も体も

使って考えて働いていかなければなりません。今の世の中では、社会が発展し、より複雑になっ

て、自分は何のために、何をやっていくのだろうと考えてしまうこともあるのではないのでしょうか。自分で独立して何かをやりたいのなら、農業は最高に楽しい職業だと思います」と農業のやりがいを語ります。

生産の現場を

もっと見てほしい

「今はスーパーに行けば農産物は買えますが、生産の現場が見えません。農業は国土や景観も守り、食べ物や安全や文化も育んでいます。このことを農業分野以外の方々と阿蘇を舞台に活躍することで伝えてきたい」と耕太さんは将来の夢を膨らませています。

今年の1月、大津夫婦に双子が誕生しました。

「この子たちも高校生くらいになったらいったん阿蘇を出て、広い世界を見てほしいと思います。学生時代はいろいろな所に行って、いろいろな経験をして、自分の居場所を探してみてください。田舎はいいよ。年を取ってからでは農業はできないよ」

(編集部)

Next Step ▶ 02Farm Web <http://www.aso.ne.jp/reisi/>
大津ファミリーが運営しているホームページです

My favorite



「南阿蘇ランドアートクラブ」という会を地元の芸術家の方や高校の美術の先生方とつくっています。身近にある自然の素材を使って、手作りを楽しむ会です。これから作品展なども開いてみたい。農業は自営業なので、ある程度自由がききます。自分たちで何でもやらなければなりません。いろいろな経験ができて、そういう意味でも楽しく生活しています。(耕太さん)

実は、この家には「ホームシアター」があります。スクリーンはシートですが、ビデオをプロジェクトで映し、近所の方々も誘って映画上映会を開きます。(愛梨さん)